

方々歩いて旅すれば
いろいろな出会いと
発見がある。
見て聞いて歩いた
まちの旅日記。

まちを歩く

Vol.9

彫刻と欄間の町「井波」 受け継がれる伝統工芸

富山県南砺市井波

写真・文 岡部知子

女性林業家の交流会があり、井波町（富山県）を訪れた。「井波彫刻」として広く知られる昨今ではあるが、私にとつての井波はやはり「欄間の井波」としての感が強い。随分以前になるが、幾つかの古い町屋で見る機会があった。重厚な板に表と裏から彫り上げた繊細な仕上がりが印象的で、各々の作品が物語風になっていたと記憶している。ま、その程度の知識でこの地を訪れたのであるが、バスが町の入り口にさしかかり、車窓から眺める町並みに心地よい衝撃が走った。町並み保存に関しては各地を見て回ったつもりであるが、「ここ

だっ！」と瞬間的に思った。到着したばかりで何がどのように感動したのかも解からないまま交流会は進行していった。が、私の頭の中は町を探索したい気持ちで破裂しそうになっていた。集参した仲間申し訳ない……と思いつつも、結局離脱。南東に伸びた参道の両端には歴史の香り豊かな町屋が並び、その先にはお寺の瓦が見えている。「ひと・町屋・寺」が調和した空間に、例えようのない安堵感が流れる。

井波町のすべては「瑞泉寺」にあると言っても良い。建立から615年の歳月が流れ、明治38年には国宝指定を受けた。動乱の南北朝時代から今日に至るまで、瑞泉寺は人々とともに時世を超えてきた。当時、中央政治をも左右した本願寺五代續如が創建したとされている……が、幾つかの説があり事実は微妙。ともあれ、「政略の城」として



▲菅原道真公を彫刻中の池田茂氏



▲真宗寺院建築の山門形式を代表する瑞泉寺山門

建立されたこの寺の運命はその後、「一向一揆」の一大拠点として越中、北陸における真宗王国の象徴として存在した。盛衰をともに生きてきた人々は「無心」の教えに念仏を唱え、「仏」への帰依を深めていった。瑞泉寺は約250年前（宝暦12年）に、町屋からの失火により類焼しているが、この再建のために京都本願寺から彫刻師・前川三四郎が派遣されてきた。山門正面にある「龍の欄間」がその作品である。この事が現在に至る「井波彫刻」・「井波欄間」の発祥根源となった。

参道に敷かれた近代的素材が妙に目を刺すが、それに負けない町屋の並びに救われて歩いた。みやげ屋、仏具屋、木工屋……等々が軒を連ねているが、平日のためか静まりかえっている。表現しづらいが、流行ってないとか……活気がないという状態ではないのである。西欧にあるシエスタの雰囲気に近い。瑞泉寺の彫刻に得心したあと、再び町並みに戻った。行き道は急ぎ寺へ向かったが、帰りを見る光景は特異に感じる……。彫刻看板、表札などが個性を主張している。ゆっくりと念入りに見て歩くうち、一軒の工房が気になった。ガラス越しに中を覗くと、木彫りの作業風景が見える。黙々と作業している職人と、まわりの静けさが重なり、一種独特の緊張感が流れている。

池田茂さん。福岡県出身の27才。3年前ドライブ旅行の途中でこの地を訪れた。「井波の彫刻」に魅せられ、そのまま弟子入りしたのだと語る。偶然にも我が息子と同年であることを知り、何とも不思議な気持ちになった。「徒弟制度」がこの現代に存在し、こうした若者が伝統工芸に没頭している姿は、母でもある私にとって、何か眩しいものでも見ている気持ちになった。話し掛けるタイミングを待ち、「こんにちは」と声を掛けた。「ア、こんにちは」ポソツとした声が返ってきた。



▲池田茂氏修行中の井波木彫工芸館



▲位置図



▲山門から見た町並み



▲仕上げを手伝った店内の横間

この後、自発的に会話してくれることは無かったが、無愛想という感じではなく、こちらの愚問にもその都度答えてくれる様は、むしろ誠実で暖かさを感じさせるものがあった。

「徒弟制度」というものは基本的に賃金なし、親方の家に同居をして、技術を習得するとお礼奉公をして独立。というプロセスが普通と聞いていた。しかし、ここ井波では月給制になっていて、5年間「木彫刻工芸高等職業訓練校」へ通わせてもらえる。入学するには本人の面接、その両親との対話によって入学許可がもらえるのだという。家族をも含めての採用判断ということ聞き、入学というよりも、「出家」のそれに似ていると思



▲瑞泉寺鐘楼



▲一番お気に入りの鐘楼の木彫

った。卒業すると2年程のお礼奉公したのち、いよいよ独立ということになる。しかし、それからが本来の試練である。「親方の彫った欄間の一部を手伝ったり、天神様を彫ったりしているのが10年後を考えると……正直言って不安になります」、「けど、この仕事が好きなのです。だから、今は何も考えないようにしています。技術面で悩むことが多々ありますから……今は色々考える余裕はありません」と語ってくれた。「欄間」の需要はどれほどあるだろう。店先に陳列された菅原道真公の木彫りの置物がどれほど売れるのだろう。欄間を彫るとなると、二枚一組で3〜4ヶ月かかってしまう。昨今の住宅事情を考えると、厳しい収支が見えてくる。現在、井波の訓練校には全国から若者たちが修行に来ている。それは瑞泉寺の歴史とともに「井波大工」・「井波彫刻」の伝統工芸が間違いなく受け継がれている証でもある。そして現在の「親方」たちは、伝統の歯車を着実に送り、次の世代へ伝承すべく懸命に今日を生きている。明確な表現こそ口に出さなかったが、弟子たちの気持ちは「親方」の苦勞を解り過ぎるほど理解している。彼らは「家族」であり、親子なのだとは知らされた。そして、独り立ちした弟子の中には、メジャーな公募展で常連的に入賞する弟子たちも出てきた。それは後輩の励みになるであろうし、親方の喜びでもある。「井波彫刻」を身につけた若者たちの作品は時代と共に変化・進歩して行く。井波で会得したものは「技術」だけではなく「心」を学んだはずである。

前川正治さんという名門の親方に弟子入りした池田さん。静かな語りながらも目に浮かびます。「行き詰まったら、瑞泉寺の鐘つき堂へ行くのですよ……いつも」と言っていた若者は、今日もお堂での彫刻を眺めているのだろうか。

おかへ・ともこ